小学校の文学教育

宮沢賢治「虔十公園林」（六年）の解釈と授業

大塚敬三

一、教材の研究

一、教材　「虔十公園林」　（宮沢賢治作、日書版「小学国語」　六年下）

（あらすじ）

いつも、なわの帯をしめて、その辺を歩きまわり、雨の中の青いやぶや、とんでいくたかをみてはうれしくなっている虔十は、子どもに笑われ、ばかにされているような、愚かなひどく知恵のおくれた人間だった。

その虔十が、あるときなんと思ったか、両親に杉苗を七百本買ってくれとたのみ、家の裏の、底は固い粘土で木など育たないとされていた草原にうえた。杉はやっぱり六年目からは全く育たずやっと九尺にのびたにすぎなかった。が、あるいはそれゆえにそれは子どもたちのすばらしい遊び場になった。

やがて、その杉林に遊ぶ子どもたちをみて喜んで笑っていた虔十も、杉を植えた虔十を怒ってなぐり到した平二もチフスで死に、その辺には鉄道が通り、工場ができ、すっかり町になった。が、虔十の形見だからと、両親は誰にも売らなかったので、杉の林はりっぱに残っていた。

あるとき、この町出身でアメリカの大学教授となっていた人が帰ってきて、林のすぐそばの小学校で講演し、虔十の林が昔のまゝそっくり残っているのをみて感動し、これを「虔十公園林」と名づけて長く保存することになった。そして、林はいつまでも多くの人に、ほんとうの幸いは何かということを教えつづけるのだった。

二、教師の解釈

私はこの一篇を読んで、「ああ、まったくだれがかし

こく、だれがかしこくないかはわかりません。」と言うアメリカの大学教授になった人間の言う、この言葉に心をひかれる。この一篇の主題はここに発するのではないかと思う。

虔十はいつもなわの帯をしめて、その辺を歩きまわり、自然の動きに心をおどらせ、喜んでいるといった、一般的にみたら、まともにこの世には通用しない、ひどく知恵のおくれた人間だ。それで、子どもたちにまで、いつもばかにされ、笑われている。このアメリカの大学教授になった人間も、その子どもの頃、ばかにして笑っていた一人だったろう。そのようにばかにされていた人間が、りっぱな杉の林を―ここでりっぱとは、たくさんあり、木材としてのゆたかな価値をもつ杉の林ではない。なにしろ、九尺以上は育たなかったのだから。杉の価値としては、低いものだった。だが、そのゆえにこそ、虔十の両親の心とともに、この林は残ることができたのだろう。―この世に残したのだ。子どもたちがいつも喜んで集まり、楽しく遊ぶことのできる林を残したのである。普通一般の私たちが、いったいどれだけのものをこの社会に残せるだろうか。

賢いということ、かしこくはないということ、それは全く固定されているものではない。みんなにばかにされ、一人前としてこの世には通用しないような人間でありながらも、虔十はこれだけりっぱな林を残していったのである。私は虔十のこの無心な行為―虔十のこの無心さは、彼の愚かさゆえ、ひどい知恵おくれゆえにでてきたものだ。一般的に賢いとみなされる無心さはどこから、獲得されてくるのだろうか。―を通して訴えてくる、誰が賢くて、だれがかしこくないか、ほんとうに賢いとは、どんなことなのか。ほんとうの幸いとはなになのかを考える。ほんとうの賢さ、ほんとうの幸いとは、どんな人間にでもどんなに知恵の遅れた人にでも宿り、手にすることができるものだ。人は、頭の働きだけで生きるものではない。また生きられるものでもない。そこには心の問題もでてくる。。目先のみの私利私欲を離れた無私の行為にふみこむことが、広く社会全体の利益にかなう結果をもたらすのだ、という一つの真理が、ここに提示されているのではないだろうか。このような行為ができるところに、真の賢さ、真の幸福がある。虔十のこの行為はそれを強く訴えている、と私は考える。

（主題）

愚かな虔十があるとき植えた七百本の杉は、大きくは育たぬが、りっぱな林となって、子どもたちがいつまでも喜んで遊ぶことのできる「虔十公園林」となって、

残った。そういうものを残すことのできた虔十の賢さ。

これはまた、作者賢治の「アラユルコトヲジブンヲカンジョウニ入レズニ」「ミンナニデクノボウトヨバレ」という「雨ニモマケズ」の人間につながることでもあろう。

（附記）

この授業をおえて二ケ月余へた今、この論稿をまとめるなかで、ふと最近読んだ雑誌の中の次のような考えを思い浮かべた。

（対談　コミューンとはなにか　久野収、新島淳良氏）

新島「ー仮に、知恵遅れの子がいるとして、知能指数を七五以上にするということに目標を置くべきでなくて、非常に幸福な知恵遅れの子供をつくりたいということですね。ー

久野「知恵遅れは知恵遅れという別の価値基準があって、逆に進んでいる知恵に比べて違った知恵をもっている。それをもっぱら隔離して、一生懸命に知恵を教え込んで、また知恵のあると称せられる社会へ復帰させるという考えはいかん。知恵遅れと、いわゆる普通の知恵の持主がお互いにそれぞれ知恵を貸し合うようなー実際、林達夫さんの著作集を読んでみると、林さんがいま研究していることは幾分そういうことなんです。――つまり根本的にいえば、阿呆とか、狂人を差別して、隔離して押し入めるという思想はいかんのじゃないか。いまやられているような近代主義の、隔離によって、教育し直すという考えは、それこそ知者のおごりじゃないか。ー　後略」

（「月刊エコノミスト」48、5月号、毎日新聞社）

もちろん、この作品をこのような観点で読んでいくなら、それは文学として享受することからは大きくはづれていくであろう。が、一つの解釈の作業をするとき、これも一つの知識になり得るのではないか。

たしかに、知恵遅れの子には、それなりの知恵がある。私が十年近く前に担任した女児は両手の神経が何かに犯されていたのか（母親の話では、赤ちゃんのとき、乳もなく、ミルクも買えないほでせつなくしていたので、ズルチンをといてのませていた。その影響かという。）鋭筆をまともににぎれない。三年生になってもかな文字が、全く読めない子だった。が、あるときの母親の話によると、東京の親類へ一度連れて行ったことがあるのだが、たった一回で、駅からその家までの複雑な地理をのみこんでしまい、二度目には、さっさと母親を案内していったという。（一年間、現在の、語形法による教科書

のやり方ではなく、音節法によるテキストによる文字指導によって辛うじて、かな文字を読めるまでに私は指導し、こぎつけたが。）

三、授業展開の角度

（一）虔十の人間像をとらえさせる。

「いつもなわの帯をしめて、笑って」森や畑を歩いている虔十。なわ、むすべるものなら、なわでもかまわない虔十。なわの帯、何か荒っぽい感じだ。

虔十の笑い―自然のちょっとした動きにも心をゆるがされ、嬉しくなる心だ。

子どもたちの笑い―虔十をばかにした笑いだ。

言いつけられると水を五百ばいでもくみ、一日いっぱい畑の草も取る虔十。すばらしい馬力だ。が、言いつけられねばできぬ愚直な人間のあわれさがある。

二、三才の幼児のように、ひどく知恵おくれの人間であり、それでも、あるいはそれであるからこそ、自然の動き、移りに敏感に心を動かされる、そういう心、感覚、普通一般の賢いとされている人には通常失われてしまったみずみずしい心を持っている人間である。

（二）その虔十がスギを植えた。

そんな虔十が、生れてはじめて、「スギ苗七百本買ってけろ」と頼んだとき、母親は驚いたろう。じっと虔十の顔をみる母親の姿にそれは表われている。

きまり悪そうにもじもじして、下を向いてしまう虔十顔を赤くして何か言いたそうにして、何も言えないでもじもじしている虔十。

じっにまっすぐに、じっに間隔正しく、スギ苗の穴をほる虔十。そういう力をもっている虔十。

虔十の母の心と虔十のイメージを深め、ここで虔十への共感を得させる。

（三）虔十の杉の林は、子どもたちの楽しい遊び場となった。

枝打ちして急にがらんとなった林に、なんだか気持ち悪くなった虔十。

（四）平二に、杉をきれとどなられたが、切らぬと、生れてはじめて逆らった虔十。

自分の植えて育てた杉の林で子どもたちが喜んで遊んでいるのは、虔十にとっても嬉しいことだった。が、虔十はその子どもたちの中へ入って、いっしょに遊ぶこ

とはできない。杉のこっちにかくれながら、口を大きくあけてハアハア笑っている。

雨の日は、誰も遊びにこぬ林の外に立ってからだじゅうずぶぬれになっている虔十。ハアハア息をつきながらだじゅうから湯気をたてている虔十。ことにはあわれに愚直な人間の姿がある。また、一面はたくましい人間がいる。

平二に、杉きれ、と言われて、はじめてきつぱりと「切られ」と逆らった虔十。その虔十のくちびるは今にも泣きだしそうにひきつっている。やっとの思いで虔十は言ったのだ。今まではなんと言われてもじもじしていてなんとも言えなかった虔十だった。だから杉の林はそれほどまでに虔十にとって、だいじなものだったのだ。が、そのために平二になぐられる虔十。なぐられてもなんとも言うこともできず、だまってなぐられている虔十のあわれさ。

(五)村はやがて町になったが、杉の林は虔十公園林としていつまでも保存されることになった。

虔十の両親は、虔十の形見だからと、決して林を売ろうとはしなかった。アメリカ帰りの博士は、ただ一つ昔の面影を残すこの林をみて、この林をつくった虔十を思いおこしてだれがかしこくだれがかしこくないかはわかりませんと言い、真の賢さというものに気がつく。そしてこの林を虔十公園林としていつまでも保存することを提案する。両親もこの博士も林をつくった虔十の心を深くく理解したのだ。

あわれに愚かな虔十がつくったこの杉の林はいつまでも、みんなに喜ばれ、残ることになった。そして人々にほんとうの幸いを教えるだろうという。ほんとうの幸いとはなにか。それは愚かな虔十のあわれな（世間一般の目からみた）一生が身をもって示していることだ。結局、世の人々に喜ばれ、なんらかの役にたつようなものが残せた人間、その人生、これだと思う。このような行為、生活、人間、その人生（あるいはその奥にひそんでいるなにかどろどろとしたこんどんがらがほんとうの幸いなのだ。

四、全体の指導計画

(一)予備学習（一時間、家庭学習）

(1)題を考える。

(2)全文を読み通し、感想をまとめる。

(3)難語句を調べる。

(4)音読の練習

(5)文章の中心（主題）を考える。

◎読みの検定、ノートの検定

(二)ひとり読み

全文を五章にわけ、めいめいでしつかりと考えながら読み、読みとつたことをノートに書きとめる。

（五時間）

(1) 愚かな虔十。

(2) その虔十が杉を植えた。

(3) その杉の林が子どもたちの楽しい遊び場となつた。

(4) 平二に木を切れと言われ、なぐられても杉をきらなかつた虔十。

(5) この杉の林は、虔十公園として、いつまでも残されることになつた。

（三）

まとめ読み

めいめいで読みとつたことを話しあい、考えあい、問題点を整理し、問題をはつきりさせる。（五時間）

(1) 虔十の笑い。

(2) 顔を赤くして何か言いたそうにしていても、何も言えないでもじもじしている虔十。

(3) ずぶぬれになつて林の外に立つている虔十。

(4) 平二にはじめて逆らつた虔十。

(5) だれが賢いのか、賢くないのか。

（四）

問題の追求。（三時間）

(1) 虔十はどんな人間か。笑い、もじもじして何も言えない、杉を植え、ずぶぬれで林を守り、平二に逆らい、なぐられ、杉を切らなかつた虔十。

(2) ほんとうの賢さとは。「だれがかしこくてだれがかしこくないかは、わかりませんが」虔のなかみ。虔十、両親、博士、平二、村の人たちは、賢いのか、賢くないのか。

(3) ほんとうの幸いとは。虔十の生涯に即して追求する。虔十公園林が教えるほんとうの幸い。

（五）

主題の追求（一時間）

人々に愚かな人間としてばかにされていた虔十が自分の利益を考えず植えて育てた杉林は、子どもたちの楽しい遊び場になり、やがて虔十公園林となつていつまでも人々に幸いをもたらすことになつた。

（六）

まとめの読みと感想文。（一時間）

（七）

読書。「宮沢賢治童話集」など（一時間）。

Ⅲ、授業の記録　（ごく一部だけ、抄出する。）

一、予備学習

(一) 虔というのは、トラツてよむのかな。トラつてよむとしたら、トラの公園の林かな。それとも、いいなにかな。

(二)虔十というのは、(1)この考えと、ぜんぜんちがう人の名だった。

(三)虔十の林が、ほんとうのさいわいというものをおしえたことだろう。ほんとうのさいわいって、よくわからないけど。(恭子)

◎これは、ノートの検定の中で、これは、と思うものを記録しておいたものから、一つここへとりだしてみた。

二、ひとり読み。ここでは、なんの説明も加えず、直接子どもたちを作品にぶつからせた。考えさせた。そこにでてきた考え、感想をどんどんノートに書きとらせた。その間、私はぐるぐるみてまわって、ノートへ朱でまるを入れたり、問いかけたり、その考えを認めたり、まるをつけたりした。時間が終ると、ノートをあげさせ、その日のうちに、でてきた考えに全部目を通し、私の評などを書きこみ、返すようにした。そのようにして、五時間のひとり読みをつづけた。その中で、これは、と思う考えは、私のカードに記録しておいた。その中から、ごく一部だけを、ここへ書きだしてみる。

(一)　第一章。(愚かな虔十。)

◎虔十は、すこしたりないからわらって森の中を歩きまわっているのだろう。でもなにがこんなにおもしろいのかな。(富江)

(二)　第二章　(杉を植えた虔十。)

(1)虔十は、まっすぐに間隔正しく穴をほることができんだから、バカでもいっしょうけんめいやればできるんだな。(富美子)

(2)①じっに間隔正しくほった虔十もこればっかりは頭をつかったと思う。

②どうして虔十は、人のまえでは口がきけないのかな。ぼくとおんなじみたいだ。(孝行)

◎バカでもいっしょうけんめいやれば、という考えと、これだけやるには頭をつかったろうと二つの考えがでている。

(三)　第三章　(子どもたちの楽しい遊び場となった杉林。)

(1)①それにどうゆうところがばかなのだろう。わたしだったら虔十のみかただ。いくらスギがそだたなくても、やるときめたら、どこまでもやりとげたい。

②七年や八年たっても二、七メートルぐらいしかのびなかったのか。でもスギはそこまで育ったのだ。虔十あきらめずにがんばれ。

③七百本のスギのえだうちをしたのだからそうとうたいへんだったろう。（久子）

◎虔十の立場にたって、読みすすめていることが、わかる。

(2)①子どもらは、すっかり虔十の林を、遊び場だとして、楽しく元気に遊んでいる。虔十の林で遊ぶのは楽しいところなんだな。ぼくもいっしょに遊びたい。

◎虔十の世界へ、なんのこだわりもなく、とけこんで、読みすすめているようだ。

②虔十は子どもらが元気よく歩くのを見て、林をつくってよかったと思う。ぼくもつくってよかったなと思う。ひとりぼっちじゃなくなるだろう。（栄治）

◎一つの予想をも生みだして、読みすすめている。

（四）第四章（平二に言われなぐられても杉を切らなかった虔十。）

(1)平二になぐられても「切る」と言わなかった虔十をみんなバカというけどバカじゃないと思った。いくらなぐられてもへたばらなかった虔十が、とても前のようにバカにされていた虔十とは思えなかった。（隆男）

◎虔十の変革を感じとってきているようだ。

(2)そのくちびるは、今にもなきだしそうにとーだから、そんなにしてまでいわなくてもいいのにな。わたしだったら、ないてしまうだろうな。わたしには経験があるからな。（貴美子）

◎自分にひきつけて読みすすめている。この子はふだんほんのちょっとしたこつにも、みるみるうちに涙ぐんでしまうことがある。

（五）第五章（（この林は虔十公園林としていつまでも残されることになった。）

(1)①虔十がいたところは、とうとう町になったのだなでも虔十がうえた林は残っている。よかった。わたしはほっとする。林がなくなったら、虔十がかわいそうだ。でもふしぎだな。もう町なのに、林がそのまま残っているなんて。

◎林の運命にかかわりあって読みすすめている。

②外国にいっていた人は、「だれがかしこくだれがかしこくないかはわかりません。ただ、どこまでも、十力の作用はふしぎだ。」と言っている。わたしはこの意味はあまりわからないけど、きっとバカな子のうえた林がいまはりっぱにそだっている。そんなところをふしぎに思っているんじゃ

ないかな。

(3)これから何千人の人たちに、ほんとうの幸いがなんだかをおしえるかがぞえられませんでしたとかいてあるけど、虔十のうえたこの林がなにかをおしえるのかな。ほんとうの幸いをどうして林がおしえるのかな。それにこの中のほんとうの幸いってなんだろう。（恭子）

◎ほんとうの賢さ、ほんとうの幸い、というこの作品の主題につながる問題へ追りつつある読みがすすんでいる。

(2)よろこんでなくのもあたりまえだろうバカといって、ばかにされていたんだから。ほんとにだれがばかで、だれがりこうだかわからない。人はすがたできめるより、その人のおこないによってきめるべきだと思う。きっともう虔十をバカよばわりする人はいないだろう。虔十という人は、何を目的に生れてきたのかわからない。はやくしんでしまった虔十がかわいそうだ。おらげのおばあさんも、年金をもらわずしんでしまった。虔十も、林が保存されることをしらないでしんでしまった。ほんとうにかわいそうだった。でも、あとにのこって、保存することになったので、いいことだと思う。（隆男）

◎虔十ー「何を目的に生れてきたのかわからない」という認識に注目した。

(3)(1)家の人が、虔十のたったひとつのかたみだ、といった。それは、虔十にたいする親の愛情だろう。これがほんとの親だということがよくわかる。

(2)虔十はたりないといわれているが、人生でくいのないことをした。それは林をうえたことだ。

(3)十力、十種類の力、それが林をつくり、子どもらがあつまり、博士が保存する。これが作用だろう。幸いは、虔十が苦労した林だろう。ぼくはそう思う。こういう美しい心をもった人は、そういないだろうとぼくは思う。（栄治）

◎くいのない人生、十力の作用の解釈、子どもなりの考えがでていておもしろい。

三、まとめ読み

ここでは、いままでの「ひとり読み」の中でめいめいに読みとってきたことを、話しあい、でてきた問題を考えあい、おたがいの考え、感想を交流させ、今まで気がつかなかった、新しい世界を発見していく。また、問題をつくりだしていく。そういう学習である。十三人の子どもたちなので、一斎授業の形ですすめた。五時間予定だったが、倍の十時間以上かかった。

ここでは、第五章をとりあげる。いくつかの問いを用意して、授業をすすめた。

問一、ここは虔十のただ一つの形見だから、これをなくすことはどうしてもできない、と言って虔十の林を売らない、虔十の父や母をどう思いますか。この言葉からどんな感じがしますか。

問二、だれがかしこく、だれがかしこくないかはわかりませんとは、どんなことか。

(一) かしこいとは。

(二) かしこくないとは。

(三) この人は、どんなことから、だれがかしこくだれがかしこくないか、わからないと考えてきたのか。

(四) 虔十はかしこい人間か、かしこくない人間なのか。

(五) この話のなかで、かしこいとはどんなことをさしているのか。かしこくないとは、どんなことをさしているのか。

問三、ほんとうの幸いとはなにか。この話の中にそれはあるのか。

◎この虔十のつくった林は、ほんとうの幸いは、どんなことだと教えているか。ほんとうの幸いとは。

(この問いかけに対して、でてきた子どもたちの主な考えは次のようなものである。)

(A) この林で遊んだ子どもたちしかわからないのではないか。

(B) こい緑、さわやかな空気、月光色の芝生がそうだ。そのほかに、なにかがある。

(C) 虔十がつくったこの林。

あとでくわしく述べたいが、このうちのBは、ほんとうの幸いに迫る重要な考えであったのだが、ここでは見逃していた。

このようにしてまとめ読みが終ったところで、今まででてきた問題点を整理し、問題をつくりだしていった。そして、次の問題の追求に入った。問題は三つにしぼられた。

四、問題の追求

(一) 虔十はどんな人間か。笑い、もじもじして何も言えない、スギを植え、ずぶぬれで林を見守り、平二に逆らい、なぐられ、スギを切らなかった虔十。このような実事から虔十という人間の姿をまとめる。

問一、虔十はどんな人間だったか。今までの虔十の行動をまとめて考えてみよう。

問二、虔十が私たちの世の中に残してくれたものは、

なんだったのか。

問三、虔十はどんな人間だったか。（ノートにまとめさせる。）

（二）ほんとうの賢さとは。「だれがかしこくて、だれがかしこくないかは、わかりません。」のなかみ。虔十、両親、博士、平二、村の人たちは、賢いのか、賢くないのかを追求する。

問一、アメリカ帰りの若い博士は「ああ、まったくだれがかしこく、だれがかしこくないかはわかりません。」と言った。この博士は、今だれがかしこくだれがかしこくないと考えているのか。

（三）ほんとうの幸いとは。虔十の生涯に即して、虔十公園林が教えるほんとうの幸いを追求する。

ここでは、まず次の大きな問いをはじめにすえた。

問一、この林が、これから多くの人々に教えるという、ほんとうの幸いとは、どんなことだろうか。

この問いかけはやはり大きすぎて、子どもたちの中に深く入りこむことはできなかった。そこで、次の小さな問いをくりだし、全体をあらためて、ふり返ってみた。

問二、この虔十公園林は、どのようにしてつくられたのか。

これには、すぐに考えが次々とでてきたので、まとめて板書していった。

(1)スギなえ。（たのむ。）
(2)植えた。兄（手伝う。）
(3)枝打ち。村の人（教える）
(4)子ども、遊ぶ。
(5)ずぶぬれ、見守る。
(6)切らね。平二（に逆らい）
(7)なくなる。（チフスで。）
(8)両親、売らなかった。形見（虔十の。）
(9)博士、虔十公園林（として残す。）

こうまとめて、ふりかえってみたときに、ここには三者の動きがあることに気づくだろう。それを確認させたかった。「ここには三つの動きがある。大きく三人の人の動きがある。それは、だれか。」と問題にした。「スギをうえたのは」「虔十」。兄も、という声もあがる。それは虔十にふくめる。(1)(2)(3)(5)(6)(7)は、虔十だ。(8)は両親だ。(9)は博士だ。この三人の動きによって、この公園林がつくられてきたことを確認する。そして、この三人の中で、この林をつくるのに一ばんだいじなのは、だれかと問うと、案外にかんたんに「虔十だ」という答が返ってきた。ここまで、まとめて、次の問いに入った。

（以下、ながくなるので、問いを書きとどめるだけにとどめる。）

問三、虔十は、なんのために、ここに杉を植え、林を育てたのだろうか。

問四、ふつうの人は、どんな目的で木を植えるのだろうか。

問五、この虔十公園林にこもっているほんとうの幸いとはなんだろうか。

この時間のノートをみてみる。

◎ほんとうの幸いとは、、、、。自分の考え。ふつうの人は、雨の中になど立っていないけど、虔十は立っている。愛情こめてそだてたから、ほんとうの幸いというものがわかるんじゃないのかな？それに金のための愛情と、林をすきなための愛情は、ちがうんじゃないかな。金のための育て方と、林がすきのためでは、ちがうんだな。

（恭子）

五、主題の追求

はじめにこの作品の構想をとらえる作業をした。五つにわけさせたが、子どもにとって、くぎり方に差がでた。それを検討して、まとめられるところはまとめ、それぞれの要旨をとらえさせ、検討していった。それから、主題の把握にとりかかった。はじめに、各章に出てくる人物をとりあげた。

(一)虔十。子どもたち。虔十の父母。
(二)虔十。虔十のにいさん。父母。平二。
(三)村のみんな。虔十。子どもら。百姓。にいさん。
(四)虔十。子どもたち。百姓。平二。
(五)博士。校長。父母。むかしの生徒。

そして、これらの人物のかかわりあいを考えさせた。(一)(二)(三)(四)は、虔十が中心にあり、(五)では、虔十の残した杉の林が中心にあることが理解されてきた。そこで、「ばかな虔十が」とだけを板書し、あとはめいめいで

◎ばかな虔十の植えたスギの林が、ほんとうの幸いがなんだかをおしえて、「虔十公園林」としていつまでも保存されたこと。（富美子）

六、まとめの読と感想文。

今までの学習の一切をうちこんで、おわりに、私は子どもたちの前で、読んだ。そのあとで、感想文を書かせた。

◎「自分のつごう」

平二は、自分のつごうがよければ、それでいい。人のことなんかかまわない。それは、虔十と平二が、かや場でいきあったとき、「おらの畑あ、日かげにならな。」

なんていって、自分の畑のことしか考えていない。日かげになるといったって、ほんのすこししかはいっていないのに、そんなことをいっている。平二はわがままだ。

虔十は、そこは、スギなどうえても成長しないことは知らない。虔十はなにも知らず、村の人たちに、言われてもうえてしまった。虔十が杉をかたいねん土の上のところにうえたら、りっぱに育った。ふつうの人なら、そんなところに杉の木はうえても育つものではない、と思っている。

虔十は、家の後ろに大きな畑がのこっていて、なんでうえたかは、あまりよくわからないが、あとになってくると、虔十は、このスギの林をとってもだいじにしているから、虔十が植えた杉林には、虔十の愛情がこもっているのだろう。虔十は、自然がすきだからうえたのかも。それとも虔十はなにもしらないで、なにもうえないからうえたのだろう。平二は、自分のことしか、考えないで、スギ切れ、なんていっているが、虔十は、自分のことばかり、考えてはいないんじゃないかな。平二は、自分のことばかり考えているから、虔十の林がねん土のところでもりっぱに育ったので、私は平二に「ざまあみろ」といってやりたい。

虔十は、いつもなわの帯をしめて、「ハアハア」わらって森の中や畑の間をわらってあるいていた。その虔十の林が、これからずっと保存される事になったのでよかったな。平二に言われた時きってしまったら、この虔十のたった一つのかたみになった林はなかったろう。また一生バカよばわりされておわったかもしれない。（敏江）

「平二は、自分のつごうがよければそれでいい。人のことなんかかまわない。」と敏江が書いてきたとき、私はあっと思った。ここをうかつに読みすごしてきたことに気づかされたからである。この平二に対照的に浮かび上ってくるのが、虔十の姿なのだから。

七、授業を終えて

ー反省と今後の課題ー

問題追求の第三時「ほんとうの幸いの追求」は二二月下旬の校内研究会に公開し、同僚の、検討をうけた。その批判の一つに、ほんとうの幸いに追っていくには、この作品の次の最後の除述が問題になるのではないか、という指摘があった。

「まったくまったくこの公園林のスギのこい緑、さわやかなにおい、夏のすずしいかげ、月光色の芝生が、これから何千人の人たちにほんとうの幸いがなんだかを教えるか、教えられませんでした。」

ここで批判をうけるまで、うかつにも私はこの叙述を見落してきた。ここの「ほんとうの幸い」にばかり気をとられて「こい緑」などに表現されている、直接的な人間の幸いを見逃していたのである。直接的に目に見え、肌に感じる幸いがなくして、ほんとうの幸いはあり得ないであろう。ほんとうの幸いは、そういう目に見え、手にふれる幸いを通して現われるはずなのだ。それはまた、まとめ読み第五章の中で、「ほんとうの幸いとはなにか。この話の中にそれはあるのか。」という問に対して、一一人の子は、すでに次のようにこたえていたのである。

「こい緑、さわやかな空気、月光色の芝生がそうだ。そのほかに、なにかがある。」これを私は、だいじだと思う若者をとどめておきながらわとのおわりの〃なにかが、ある処にのみきをとられ、その前の部分の重要性を見ぬけずに、性急にほんとうの幸い〃の追求にのみ突っ走ってしまっていたのである。

もちろん、ここでより本質的でよりだいじなのは、〃〃ほんとうの幸い〃であり、それがなにかを探りとることであるのはたしかなことだ。が、その〃ほんとうの幸い〃の本質に迫るには、事実として目に見える「こい緑」などの具体的な叙述を通過しなければならなかったのだと思う。ここをくぐりぬけることなしにこの〃ほんとうの幸い〃の本質をつかむことは、むずかしいことだったのだ。つまり、林一般が、私たち人間にあたえる幸いを、このこい緑以下もまた与えてくれるのである。が、そういうことを通して、虔十公園林では、それだけの直接的な幸いばかりでなく、その底にもつところの奥深いものを私たちに教えてくれるのである。それは、虔十の愚かさとかかわりがあるし、ほんとうの賢さともつながってくるものである。が、いずれにしても、それはこの叙述の具体的なものを追求して、それを深く掘りさげていくことによって、可能となったのではないか。今、ふり返ってみて、私はそう考えるのである。このように目に見える幸いをもたらすことのできた根本にあるものそれがほんとうの幸いなのだ。

もう一つの平二の身勝手さの追求とともにこれが、この「虔十公園林」の主題に迫る重要な手がかりだったのだと思う。

（新治郡出島村立美並小学校教諭
昭和二八年度教育学部、中、国文科修）

付記

私はこの四月に志士庫小より、美並小に転任し、今、四年生二十四人と学習をはじめたところである。が、この実践は、この三月から三月にかけてのもので、九年に及んだ志士庫小での最後のものである。

大塚敬三　　茨城県新治郡出島村有河一九一